

中学校サッカー部における選手の主体性に影響を与える要因

コーチング科学研究領域

5014A045-1 渡辺 純

研究指導員：堀野博幸教授

序論

平成 20 年、学習指導要領が改訂され、学校教育現場では生徒の主体性を育む教育活動の研究が注目され実践されるようになった。そこで本研究では、学校教育現場の教育活動となっている主体性を部活動の視点から研究を進めていく。

主体性について論じていくにあたって、主体性と自主性の相違点を明確にしていなければならない。なぜなら、一般的に主体性と自主性の相違について曖昧な部分が多いからである。そこで本研究では先行研究を参考に、主体性を「子どもたちが義務感にとらわれずに、自らの意志で課題を選択・判断し、自己の責任において自己決定する能動的態度であり行動」と定義づけ論を展開することとする。

では、学校教育現場で自分の意志で判断し能動的に行動できる主体性のある人材をどのように養成したらよいのであろうか。精神分析学的発達論を展開したエリクソンによれば、中学生の発達課題は「他者との関わりの中で主体性を発揮していくこと」とされている。つまり、学校教育現場には、この発達課題に対する対応と指導を通して、主体性を育成していくことが期待されているのである。しかしながら、数多くの先行研究において、実際は主体性の育成を理念として掲げているものの、現場では自主性が重んじられており、部活動でも同様の現象をみることができると指摘さ

れている。

また、スポーツ集団が個人に与える影響について多くの研究がなされてきたが、中学生を対象として主体性に影響を与える部活動の要因を明らかにしたものはない。さらにこれらの研究では主体性と自主性を明確に区分し、そのうえで個人と集団の関係性というものにまで踏み込んだ考察が行われていない。そこで本研究は、質問紙調査を用いて中学校のサッカー部を対象に部活動における生徒の主体性に影響を与える要因を明らかにし（目的 1）、その結果から主体性の育成に結びつく指導・支援の可能性を探る（目的 2）。その上で今後の部活動のあるべき姿を検討することを目的とした（目的 3）

方法

中学校のサッカー部 10 チームに、2015 年 7 月時点で所属する選手を対象とし、配票調査法による質問紙調査を行った。363 人分の質問紙を回収し、そのうち回答に不備のなかった 348 名分のデータを分析に用いた。質問紙は、中学生が認識する部活動（角谷, 2001）と主体性尺度（浅海, 1999）の 2 種類のものを用いた。

分析・結果

回収した質問紙を分析ソフト Windows 版 SPSS 23 を用いて、主体性に影響を与えている 9 因子を独立変数とし、「主体性」を従

属変数として重回帰分析を行った結果、「生活充実感」，「部活での自律欲求満足度」，「自己承認感」から「主体性」に対する標準偏回帰係数 r

表 1 重回帰分析の結果
は有意であった（表 1）。

n=348			
	従属変数		
	主体性		
	β		VIF
自律欲求満足度	.364	***	1.785
所属欲求満足度	-.013		1.941
生活充実感	.173	**	2.526
自己承認感	.257	***	1.893
他者からの承認感	.069		1.273
目標志向性	.042		1.659
部員主体性	.026		2.057
技術指導性	.065		1.405
集団維持性	.008		1.399
R ²	.514	***	
*p<.05 **p<.01 ***p<.001			

考察

目的 1. 重回帰分析の結果から「生活充実感」，「部活での自律欲求満足度」，「自己承認感」の 3 つの因子が生徒の主体性に影響を与えていることが明らかとなった。

目的 2. 上記の 3 因子を育む（主体性の育成）ためにどのような指導・支援が可能なのか先行研究をもとに考察する。

まずは、「生活充実感」と「部活での自律欲求満足度」について、友人関係と課題に関する研究を行った岡田（2008）は援助提供（生徒自らが他者に教えること）が「自律性（autonomy）」と「充実感」に正の影響を与えているとしている。ここから、選手一

人ひとりが教える立場に立つこと、すなわち選手同士が互いに教え合うことが「自律性」と「充実感」に有効であるということが示唆された。従って、指導者には、それぞれの選手に応じた指導をしながら、選手同士が教え合える環境づくりが求められるであろう。

次に、自己承認感については、先行研究において自己を中学生には自分を否定的に捉えてしまう傾向がみられると報告されている。しかし、このような傾向は中学生に限ったことではなく、臨床心理学では、個々人が自己対話し修正しなければ生涯に渡って自己否定した感情に支配され続けるとされている。従って、指導者には生徒ひとり一人が自ら自己対話を可能にする関わり方に関する専門性が求められることであろう。

目的 3. 先行研究において、人間関係開発を意図した活動を取り入れることで、チーム内のコミュニケーションが円滑になることが報告されている。本研究では主体性の育成について、選手同士が教え合い、学び合う環境づくりの重要性を主張した。そのベースとなる人間関係を築いていく上で構成的グループ・エンカウンターなど取り組みの有効性が示唆される。このような取り組みを実施するためには、指導者が専門的な知識と技術を身につけなければならない。指導者には技術指導だけではなく、多岐にわたる専門性を高めていくことが求められるのであろう。